The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『徒然草』における中国隠逸思想の影響
Author(s)	謝, 立群
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43339
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【7】

氏　　名	謝（しゃ）　立（りつ）　群（ぐん）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　16697　号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学　位　論　文　名	**『徒然草』における中国隠逸思想の影響**
論文審査委員	（主査） 教　授　伊井　春樹 （副査） 教　授　後藤　昭雄　　助教授　荒木　　浩

論文内容の要旨

兼好の『徒然草』は、古典文学のうちでも親しみやすい作品として享受され、江戸期以来数多くの注釈書の成立とともに、随筆の範疇にあるとはいえ、教訓や故実、説話、思想書の性格を持つ書としても読まれてきた。とりわけ著者が出家者であるだけに、仏教や中国の隠逸思想とのかかわりについても言及され、その研究の蓄積には膨大なものがある。そのような中にあって、申請者は老荘思想の受容に視点を定め、詳細な中国文献との比較により、兼好が求めようとした隠者世界のあり方を考察していく。本論文は四章からなり、第一章「中国隠逸と日本の遁世」では第一節「中国の隠逸」、第二節「日本の遁世」、第二章「屈原と謝霊運」では第一節「第二十一段『人遠く、水草清き所にさまよひ歩きたる』を中心に」、第二節「第百八段『心常に風雲の興を観ぜしかば』を中心に」、第三章「許由と盛親僧都」では第一節「第十八段に込められた思想」、第二節「第六十段の盛親僧都に込められた中国の隠逸者像」、第四章「『徒然草』における老荘思想の受容」では第一節「第十二段『まめやかの心の友』についての考察」、第二節「『徒然草』における理想的な隠遁のあり方についての考察」とからなる。

まず第一章では中国における隠逸思想には儒家的隠逸と老荘的隠逸が存し、そこから日本における隠逸者の系譜をたどり、とりわけ『徒然草』における隠者の理想像を求める。兼好にとっての理想は、西行や長明ではなく、中国の隠逸者たちであったことを明らかにする。第二章と第三章では、具体的に『徒然草』の作品を分析し、第二十一段の「水草清きところ」の表現に屈原の存在を指摘し、慧遠が謝霊運の白蓮社入りを許さなかった背景、第十八段の許由には顔回との混同があり、兼好の理想とするのは盛親僧都であったことなどを論じていく。第四章では、兼好は老荘思想、とりわけ朝隠思想の影響を強く受けており、その生き方として盛親僧都を理想の姿として描いたのだとする。

論文審査の結果の要旨

『徒然草』の思想的な背景として、仏教や隠逸とのかかわりが指摘され、それに関する研究も多く存するとはいえ、老荘思想に焦点を当て、詳細な出典や影響関係を論じることはそれほどなされてはこなかった。中国での隠逸形態は、山林江湖への隠逸から、心のあり方としての「朝隠」へと変化し、さらに仕官と隠逸とを両立する「中隠」が生じるが、このような複雑な状態がそのまま日本へ流入してくる。中国と日本との歴史的な考察とともに、『徒然草』の老

荘思想を剔抉し、仏教思想と老荘思想との融合をはかり、独自の隠者世界を体現しようとしたのが兼好であったとする。

第二十一段の「水草清き所にさまよひありきたる」の背景に屈原が重ねられるとの指摘は、中国と日本とのそれぞれの屈原像を詳細に比較検討した上での結論である。また、第百八段の謝霊運像についても、中国での人物像と日本に入って形成されていった姿とを、さまざまな資料を用いて明らかにし、「風雲の思」については、兼好独自の解釈によるとする。そこから原典の表現と、日本で生じた違いなど、従来とは異なる新しい発見や解釈がなされ、有意義な研究成果といえよう。許由と顔回とが「瓢」との結びつきで取り上げられ、両者を同一視する資料の存在など、貴重な考察といえる。ただ、『徒然草』の文章から屈原像をイメージ化するのが正確な読みなのか、盛親僧都の故事に陶淵明の逸話を重ねて読むべきなのかとなると、厳密なところきわめて判断は困難になってくるし、深読みとの考えも生じないわけではない。

『徒然草』の思想的な研究分野に、中国の老荘思想という視点から果敢に取り組み、数多くの中国や日本の資料を用いての考察は、いささか難点はあるとはいえ、すぐれた成果であるといえる。とりわけ随所に披瀝する「風雲」や「瓢」「しろうるり」などの考証は、老荘思想の影響の究明とともに、今後の『徒然草』研究に裨益するところは大いなるものがあろう。このような次第で、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位に充分ふさわしい価値を有するものと認定する。